目次に戻る

保育者及び小学校教員養成課程の学生における読譜力について
― 大学1年次学生の実態調査 ―

On the Reading Music Ability of the Students in the Course for Training of Nursery or Elementary School Teachers
― Survey on the Actual Condition of University First Year Students ―

溝　部　ちづ子・道　法　亜梨沙
Chizuko MIZOBE and Arisa DOHO

キーワード：音楽教育・読譜・保育者・小学校教員・学校教育

Ⅰ　はじめに

保育者や小学校教員を志望する学生にとって，「音楽教育」は重要な学びの一つである。

保育現場では，保育者は子どもの音楽的活動を支援し，子どもの「表現」を豊かにするための音楽的基礎知識や演奏技術などが求められる。また小学校教育現場では「表現」や「鑑賞」の活動を通して，音楽を愛好する心情や感性を育て音楽活動の基礎的な能力を培うために，音楽的知識・技能や指導技術が必要とされる。

こうした中で，本学の保育士・幼稚園教員・小学校教員養成課程では，1年次には「音楽Ⅰ・Ⅱ」の授業を設定し，主として「ピアノの弾き歌い」に取り組んでいる。今年度で10年目となる保育者及び小学校教員養成学科だが，毎年かなりの学生が楽譜の「読譜」に難しさを感じ，ピアノ技能の習得に困難を感じてきたようだ。

ピアノ技能の習得で最初に課題となるのは「読譜」である。楽譜を見て音程・旋律・リズムなどの音楽情報を理解し，鍵盤での演奏作業へと移す必要がある。「読譜力」とは，緒方（緒方2010）によると「五線譜に示された音楽情報を読みとることができるという知的能力」と「音楽を楽譜から視覚的に捉えて，階名で歌唱したり楽器で演奏したりできる表現能力」の2つの側面があるとしている。

一方，小学校・中学校の義務教育では，音楽の授業の中で，「読譜」はどのように指導されてきたかというと，学習指導要領（現大学生が小・中学校教育を受けた時点のもの）では，次のように示している。

○平成20年文部科学省告示小学校学習指導要領「内容の取扱いと指導上の配慮事項」の中で

（3）歌唱の指導については次のとおり取り扱うこと。

ア　相対的な音程感覚を育てるために，適宜移動ド唱法を用いること。

各長調の主音をドとし，各短調の主音をラとした階名唱において，音程の感覚を相対的に感じとる力を育てること。

（6）各学年の〔共通事項〕のイ「音符，休符，記号や音楽にかかわる用語」は次の通り。指導に当たっては，単にその名称やその意味を知ることだけでなく表現及び鑑賞の様々な活動の中で，その意味や働きを理解したり表現及び鑑賞の各活動に用いたりするようにすることが重要。特に配当学年は示していないが取り扱う教材，内容との関連で必要と考えられる時点でその都度繰り返して指導していくようにすることが大切。

○平成 20 年文部科学省告示中学校学習指導要領「内容の取扱いと指導上の配慮事項」

2（1）ウ　相対的な音程感覚などを育てるために，適宜移動ド唱法を用いること。

（4）読譜の指導については，小学校における学習を踏まえ，♯や♭の調号としての意味を理解させるとともに，3 学年間を通じて，1 ♯，1 ♭程度を持った調号の楽譜の視唱や視奏に慣れさせるようにすること

（8）共通事項―小学校の示すものに加え，次に示すものを取り扱う。

○〔共通事項〕の扱いについては，小学校・中学校ともに，「児童や生徒の学習状況を考慮して，次に示すものを取り扱うこと」としている。小学校では，36 個の音符，休符，記号や音楽にかかわる用語を示し，中学校ではさらに，27 個の用語や記号を示している。また，小学校学習指導要領音楽の指導内容の変遷を見ると，昭和 53 年の改訂ごろより，「読譜」の指導内容は大幅に制限され，「記譜」の指導事項も示されなくなり，平成 10 年に続き平成 23 年の指導内容は前述のとおりである。

このような現状を踏まえ，本稿では，小・中・高等学校を修了したばかりの保育者及び小学校教員養成課程を履修する大学 1 年次の学生たちにとって，音楽の基礎知識であり，リテラシーである「読譜」に関してどのような実態であるかについて，調査・分析し，その課題を探ることを目的とする。

Ⅱ　方法

（1）　調査対象者

本学子ども発達教育学科 2018 年度入学生 69 名（男性 26 名，女性 43 名）を対象とする。

（2）　手続き

69 名の調査対象者に対し，2018 年 9 月に質問紙調査を実施した。質問紙の実施は「この調査は統計を取る目的だけに使われるものです。それ以外の目的に使われることはありませんのでありのままご記入ください。」と教示文を付して，事前説明した。

（3）　質問紙の構成

1．大学入学前にピアノを習った経験の有無：①ある　　②ない

1 － 1．大学入学までにどの程度ピアノが弾けたか。4 項目のうち 1 つを選択：
①バイエル程度　②ブルグミュラー程度　③ソナチネ程度　④ソナタ以上

1 － 2．ピアノを習っていた期間。5 項目のうち 1 つを選択：① 1 年未満　② 1 年～ 3 年未満　③ 3 年～ 5 年未満　④ 5 年～ 10 年未満　⑤ 10 年以上

2．ピアノ以外に演奏できる楽器の有無：①ある　　②ない

2 － 1．演奏できるものをすべて：自由記述とした。

3．「うた」を覚えるときの方法。複数回答：
①楽譜（ドレミ～）を読んで覚える　② CD や MD，TV，携帯，パソコンの音源を聞いて覚える　③友達や先生が歌うのを聞いて覚える　④楽器でメロディー（旋律）を弾いて覚える　⑤独学で覚える

4．学校（小中高）の音楽授業で学んだ内容。多い順に 3 つ選択：①歌・合唱　②楽器演奏　③鑑賞　④音楽理論（楽典）　⑤創作　⑥音楽史　⑦その他

5．学校行事として合唱の発表会やコンクールの有無：①あった　　②なかった

6．高校での「音楽」選択の有無：①はい　　②いいえ

7．音楽系のクラブに所属の有無：①はい　　②いいえ

8．楽譜が読めるか。（共通教材やピアノ弾き歌い曲など）4 件法で評定：
①ほとんど読めない　②あまり読めない　③やや読める　④よく読める

9．楽譜の音階（ドレミ～）が読めるか。4 件法で評定：
①ほとんど読めない　②あまり読めない　③やや読める　④よく読める

9 － 1．ト音記号の楽譜で固定ド読譜の可否。4 件法で評定：①ほとんど読めない
②あまり読めない　③やや読める　④よく読める

9 － 2．ト音記号の楽譜で移動ド読譜の可否。4 件法で評定：①ほとんど読めない
②あまり読めない　③やや読める　④よく読める

10．ヘ音記号の楽譜で固定ド読譜の可否。4 件法で評定：
①ほとんど読めない　②あまり読めない　③やや読める　④よく読める

11．リズムの読譜の可否。4 件法で評定：　①ほとんど読めない　②あまり読めない
③やや読める　④よく読める

12．拍子の読譜の可否。4 件法で評定：①ほとんど読めない　②あまり読めない
③やや読める　④よく読める

13．楽譜の読み方を覚えた時期と方法。複数回答：①小学校の音楽授業　②中学校の音楽授業
③高校の音楽授業　④部活　⑤習い事　⑥友達から　⑦独学

14．自分に身につくと考える読譜の方法。複数回答：
①ピアノの練習曲を増やす　②共通教材を階名唱で歌う　③授業の中で楽譜の読み方（楽典）に特化した時間を設ける　④記譜と読譜を合わせて学ぶ時間をとる　⑤独学で楽譜を読む課題に取り組む　⑥その他

15．24 個の音符，休符，音楽にかかわる記号について読譜の可否。それぞれ 4 件法で評定：
①わからない　②あまりわからない　③まあまあわかる　④よくわかる

（24 個の音符，休符，音楽にかかわる記号）

Ⅲ　結果

（1）　分析方法

本調査の主たる目的は，保育者及び小学校教員養成課程を履修する大学 1 年次の学生たちの「読譜」に関する実態を調査・分析し，どのような課題があるかについて，質問紙調査を行い，課題や可能性を明らかにすることであった。分析ソフトとして，SPSS（Version 25）を用いた。

（2）　将来の希望職種と入学前のピアノ等経験有無及び習熟度

①将来の希望職種：フェイスシートで希望職種を尋ねた結果，幼稚園・保育園希望者が 29 名，小学校が 34 名，その他が 6 名だった。約半数が小学校教員を希望し，約半数が保育者を希望している状況である。

②入学前のピアノ経験の有無:「ある」が 37 名の 53.6％,「ない」が 32 名の 46.4％であった（図 1）。

入学前にピアノを習った経験について，小学校教員希望者，保育者希望者別に χ^2 検定を行った結果，保育者希望者ついては，ピアノを習った経験のある学生が有意に多く（$\chi^2 = 9.97$，$df = 1$，$p < .01$），小学校教員希望者についてはピアノを習った経験のない学生が多い傾向にあるが，有意

差は見られなかった（p = .09）。

また，ピアノ経験の「ある」学生のピアノ習熟度は表 1 に，習った期間を表 2 に示す。

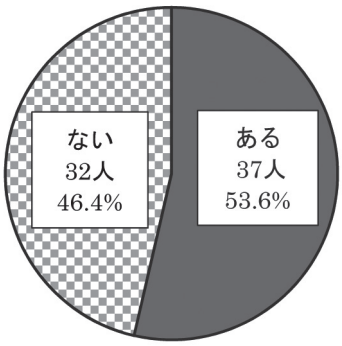


図 1　入学前のピアノ経験

表 1　ピアノ経験が「ある」学生のピアノ習熟度

	バイエル程度	ブルグミュラー程度	ソナチネ程度	ソナタ以上	合計
人数	19	10	3	4	36
%	52.8	27.8	8.3	11.1	100.0

表 2　ピアノを習った期間

	1 年未満	1 年～3 年未満	3 年～5 年未満	5 年～10 年未満	10 年以上	合計
人数	5	12	3	5	11	36
%	13.9	33.3	8.3	13.9	30.6	100.0

③ピアノ以外の楽器経験:「ある」が 13 名,「ない」が 56 名。81％が「ない」と回答した。また，13 名の経験した楽器は，ギター・エレキギター・アコースティックギター・エレキベース・バイオリン・サックス・アコーディオン・トロンボーン・トランペット・チューバ・ユーフォニューム・クラリネット・太鼓・打楽器であった。

（3）　小学校・中学校・高等学校において学んだと認識している音楽授業の内容

学生が学校時代に学んだ授業内容として,「歌･合唱」「楽器演奏」「鑑賞」「音楽理論（楽典）」「創作」「音楽史」「その他」の 7 種類を挙げた。音楽授業内容順に 3 位まで選択したものを個人毎に数量化し，平均値・標準偏差値を出した。表 3 に示す。その結果，1 位「歌・合唱」2 位「楽器演奏」3 位「鑑賞」までが多く，あとは「音楽史」,「音楽理論（楽典）」がわずかな数値で続いている。

表 3　音楽授業内容毎の回答人数・合計（%）・平均値・標準偏差値

	歌・合唱	楽器演奏	鑑賞	音楽理論(楽典)	創作	音楽史	その他
1 位	60	6	2	1	0	0	0
2 位	8	38	13	2	0	7	0
3 位	1	9	35	7	1	14	0
合計	69	53	50	10	1	21	0
%	100.0	76.8	72.5	14.5	1.5	30.4	0.0
平均値	2.86	1.49	0.97	0.20	0.01	0.41	0.00
(SD)	(0.39)	(0.95)	(0.77)	(0.56)	(0.12)	(0.67)	(0.00)

なお, 高校で音楽を選択したものは, 69 名中,「はい」が 41 名（59.4％）,「いいえ」が 28 名（40.6％）であった。

（4）　読譜についての自己認識度

①楽譜が読めるか（小学校共通教材やピアノ弾き歌い教材など）の自己認識度:大学 1 年前期「音楽Ⅰ」で扱う教材について，楽譜が読めるかどうかの自己認識度を 4 件法で評定させた結果，図 2 の通りであった。「ほとんど読めない」が 13 名（18.8％）,「あまり読めない」が 16 名（23.2％）,「やや読める」が 28 名（40.6％）,「よく読める」が 12 名（17.4％）であった。平均値は 2.57，標準

偏差値は 0.99 であった。

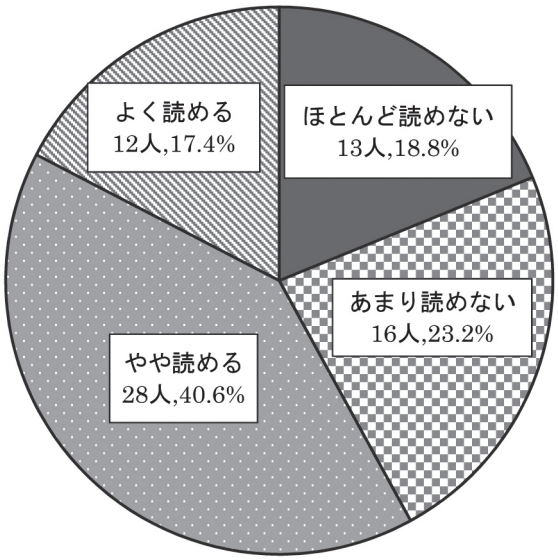


図 2　読譜（共通教材・弾き歌い教材等）についての自己認識度

②「読譜」について，詳細な項目での自己認識度：前述で「読譜」の自己認識度を概観したが，さらに詳細な項目での「読譜」の可否について，自己認識度を 4 件法で評定させた。詳細な項目とは，a「楽譜の中の音階（ドレミ）が読めるか」 b「ト音記号の楽譜が固定ドで読めるか」 c「ト音記号の楽譜が移動ドで読めるか」 d「ヘ音記号の楽譜が固定ドで読めるか」 e「リズムの楽譜が読めるか」 f「拍子の楽譜が読めるか」の 6 項目である。その結果は表 4 に示す。全体として,「読める」学生が比較的多いのは,「ト音記号の楽譜を固定ドで読むこと」であり,「読めない」学生が比較的多いのは,「ト音記号の楽譜を移動ドで読むこと」「リズムの楽譜を読むこと」「拍子の楽譜を読むこと」であった。

表 4　読譜について詳細項目毎の人数（%）・平均値・標準偏差値

		ほとんど読めない	あまり読めない	やや読める	よく読める	合計	平均値（SD）
a「楽譜の中の音階（ドレミ）が読めるか」	人数	7	17	27	18	69	2.81
	%	10.1	24.6	39.1	26.1	100.0	(0.94)
b「ト音記号の楽譜が固定ドで読めるか」	人数	5	12	25	27	69	3.07
	%	7.2	17.4	36.2	39.1	100.0	(0.93)
c「ト音記号の楽譜が移動ドで読めるか」	人数	33	11	13	12	69	2.06
	%	47.8	15.9	18.8	17.4	100.0	(1.17)
d「ヘ音記号の楽譜が固定ドで読めるか」	人数	16	14	15	23	68	2.66
	%	23.5	20.6	22.1	33.8	100.0	(1.18)
e「リズムの楽譜が読めるか」	人数	20	23	14	12	69	2.26
	%	29.0	33.3	20.3	17.4	100.0	(1.07)
f「拍子の楽譜が読めるか」	人数	25	16	15	13	69	2.23
	%	36.2	23.2	21.7	18.8	100.0	(1.14)

また，4 件法の「①ほとんど読めない」と「②あまり読めない」を「読めない」グループとし，「③やや読める」と「④よく読める」を「読める」グループとし，保育者希望者，小学校教員希望者別に χ^2 検定を行った。その結果は次の通りである。

a「楽譜の中の音階が読めるかどうか」については，保育者希望者において有意に「読める」と認識する学生が多い（$\chi^2 = 5.83$，$df = 1$，$p < .05$）。

b「ト音記号の楽譜が固定ドで読めるかどうか」については，小学校教員希望者（$\chi^2 = 5.77$，$df = 1$，$p < .05$），保育者希望者（$\chi^2 = 12.45$，$df = 1$，$p < .01$）ともに有意に「読める」と認識する学生が多い。

c「ト音記号の楽譜が移動ドで読めるかどうか」については，小学校教員希望者において「読めない」と認識する学生が多い傾向にあるが有意差は見られなかった（$p = .09$）。

d「ヘ音記号の楽譜が固定ドで読めるかどうか」については，保育者希望者において「読める」と認識する学生が多い傾向にあるが有意差は見られなかった（$p = .10$）。

e「リズムの楽譜が読めるかどうか」については，小学校教員希望者において有意に「読めない」と認識する学生が多い（$\chi^2 = 4.24$，$df = 1$，$p < .05$）。

f「拍子の楽譜が読めるかどうか」については，小学校教員希望者において「読めない」と認識する学生が多い傾向にあるが，有意差は見られなかった（$p = .09$）。

③「読譜」を覚えた時期・方法：「小学校の音楽授業」「中学校の音楽授業」「高校の音楽授業」「部活」「習い事」「友達から」「独学」の 7 つから複数回答で回答した結果を表 5 に示す。

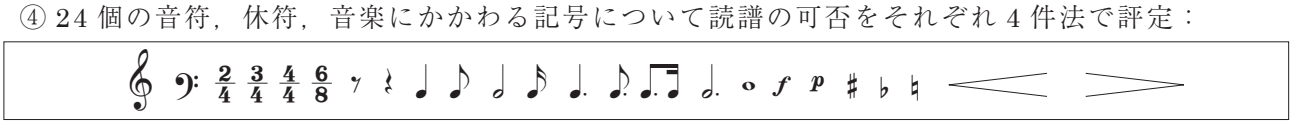
表 5 「読譜」を覚えた時期・方法毎の人数（%）

	小学校の音楽授業	中学校の音楽授業	高校の音楽授業	部活	習い事	友達から	独学
人数	35	28	10	4	33	6	6
%	50.7	40.6	14.5	5.8	47.8	8.7	8.7

また，前述の質問項目「楽譜が読めるか（小学校共通教材やピアノ弾き歌い教材など）の自己認識度」と「読譜を覚えた時期・方法」との関係を見るため，「楽譜が読めるかの自己認識度」を従属変数とし，「読譜を覚えた時期・方法（小学校の音楽授業・中学校の音楽授業・高校の音楽授業・部活・習い事・友達から・独学）」の 7 つを説明変数とする重回帰分析（強制投入法）を行った。

その結果，「楽譜が読めるかの自己認識度」についての重決定係数は（$R^2 = .36$，$p < .01$）有意であった。説明変数からの標準回帰係数を確認すると，「習い事（$\beta = .57$，$p < .01$）」と「部活（$\beta = .23$，$p < .05$）」で正の影響が示された。

④ 24 個の音符，休符，音楽にかかわる記号について読譜の可否をそれぞれ 4 件法で評定：



分析として，まず 24 個の音符，休符，音楽にかかわる記号について，学生の理解度の類似性を見るため，階層的クラスター分析（グループ間平均連結法）を行い，続いて一元配置分散分析および多重比較（Bonferroni）を用いて 4 つのクラスター間の比較を行った。

まず，クラスター分析の結果，クラスター①（𝄐・𝄑・♯・𝑓・𝑝・𝄽・𝄞・𝄢 の 8 種類），クラスター②（♩.・𝅗𝅥.・♪.・♪・♫ の 5 種類），クラスター③（𝄴・𝄵・𝄶・𝄷 の 4 種類），クラスター④（♭・♮・♪・𝅗𝅥・♩・𝅝・♪ の 7 種類）という 4 つのクラスターを得た。

続いて一元配置分散分析の結果，これらのクラスター間の値に有意差が見られた（F（3,270）= 13.56，$p < .01$）。

どのクラスター間に差があるかを多重比較でみた結果，クラスター①（$\bar{X}$ = 3.64，SD = 0.58）は他のクラスターより有意に値が高かった。また，クラスター②（$\bar{X}$ = 2.70，SD = 1.03）はクラスター①とクラスター④より値が低かった。クラスター③（$\bar{X}$ = 2.93，SD = 1.07）はクラスター①より値が低く，クラスター④（$\bar{X}$ = 3.21，SD = 0.89）はクラスター①より低いがクラスター②よりは高かった。

つまり，クラスター①（ < ・ > ・♯・*f*・*p*・𝄽・𝄞・𝄢 ）は，他の音符，休符，記号よりも意味がよく理解されている。クラスター④（♭・♮・♪・𝅗𝅥・♩・𝅝・♪ ）は，クラスター①よりは学生の理解度が低いが，クラスター②（♩.・𝅗𝅥.・♪.・♪・♫ ）よりは理解されていると言える。

Ⅳ　考察

本稿の目的は，高等学校を修了したばかりの保育者及び小学校教員養成課程を履修する大学1年次の学生たちにとって，音楽の基礎知識であり，リテラシーである「読譜」能力に関してどのような実態であるか，調査・分析し，その課題を探ることであった。分析結果からの考察をつぎのように3点に整理した。

1点目は，入学前の楽器経験の有無と将来の希望職種についてである。

入学前のピアノ経験の有無については，「ある」と「ない」はほぼ半数である。ピアノ以外の楽器経験では，81％が「経験がない」と回答した。音楽関係の部活の経験も極めて少ない状況が見える。

将来の職業希望職種別にみると，保育者希望者は「ピアノ経験がある」とする学生が多く，小学校教員希望者は「ピアノ経験がない」とする傾向があった。保育者を希望するということは，音楽指導が重要な要素になることが高校の進路指導を経て学生が理解していることであることが推察できるが，「ピアノ経験者」の中の8割が，バイエルかブルグミュラーの段階であることは，保育者の能力としても今後のトレーニングの必要が大いにあることがわかる。また，小学校教員希望者は，小学校で「音楽」の授業を指導する立場を考えると，「ピアノ経験がない」ことからのスタートでは，大学での音楽の学びやトレーニングがいかに重要かが見えてくる。

2点目は，小学校・中学校・高等学校における音楽授業内容についてである。

現大学1年次の学生が義務教育を受けた時の学習指導要領では，「音楽」の目標は「表現及び鑑賞の活動を通して，音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに，音楽活動の基礎的な能力を培い（小学校），音楽文化についての理解を深め（中学校），豊かな情操を養う。」とある。内容は，「A表現」（歌唱・器楽・音楽づくり・創作）・「B鑑賞」そして〔共通事項〕である。

また，指導計画の作成にあたって，〔共通事項〕の扱いは次のようにある。「各学年の内容の〔共通事項」は表現及び鑑賞に関する能力を育成する上で共通に必要となるものであり，表現及び鑑賞の各活動において十分な指導が行われるよう工夫すること。」とある。

〔共通事項〕には大きく分けて2領域があり，「ア，音楽を形作っている要素」と「イ，音符，休符，記号や音楽にかかわる用語」であるが，配慮事項として「各学年の〔共通事項〕のイの「音符，休符，記号や音楽にかかわる用語」については，児童生徒の学習状況を考慮して，次に示すものを取り扱うこと。」とあり，小学校では，イとして36個，中学校ではさらに27個を付け加えている。

このような状況の中で，質問紙では小学校・中学校において多く学んだと認識している音楽授業の内容を尋ねると，圧倒的に「歌唱・合唱」で，続いて「楽器演奏」であり，「音楽理論（楽典）」は6項目中5番目であったことから，学生の意識の中では，ほとんど「学んでいない」という認識

であることがわかる。

3点目は，読譜能力に関する自己認識度についてである。

楽譜が読めるかどうか自己認識度を尋ねると,「よく読める」「やや読める」が合わせて約58%,「ほとんど読めない」「あまり読めない」が合わせて約42%である。さらに詳細な項目では，ト音記号の固定ドで読むことのみが比較的「読める」認識であり，移動ドやヘ音記号の楽譜は「読めない」とする学生が多く，リズム譜や拍子記号においては半数以上が「読めない」と認識している。

また，24個の音符，休符，記号の理解度調査からは，比較的理解しているグループが，（𝄐・𝄑・♯・𝒇・𝒑・𝄽・𝄞・𝄢）や（♭・♮・♪・𝅗𝅥・♩・𝅝・♪）であり，理解していないグループが（♩.・𝅗𝅥.・♪.・♪・♩♩）と（$\frac{2}{4}$・$\frac{3}{4}$・$\frac{4}{4}$・$\frac{6}{8}$）であることから，この差が，学校生活の中の学びの質は勿論のこと，学習経験や演奏経験の多少や時間のかけ方によるものであろうと考えられる。

このような状況では，ピアノ演奏や弾き歌いなど音楽全般の活動に困難を感じていることがわかる。

最後に，今回の調査は，学生がどのくらい「読譜力」について自己認識しているかを調査したものではあるが，読譜が正しくできているかや音楽基礎知識を正しく理解しているかの理解度をチェックしたものではない。今後の学生の資質向上とともに効率的なピアノ演奏能力や弾き歌い能力育成を目指しながら，読譜理解度を進めていく必要があると考える。

先行研究において保育現場で仕事をする保育者が必要とする音楽教育の調査をしているが，新任～3年目までの幼稚園教諭，保育士の音楽能力についての満足度調査では，ピアノ演奏能力と弾き歌い能力，幼児音楽の知識量，音楽理論が低いとする結果事例（平石 2014）がある。また音楽基礎知識の理解度及び1週間のピアノ練習日数がピアノの演奏技術に関連していることが明らかになったことも判明している。（岩佐，富田，烏丸 2015）

ハンガリーの作曲家コダーイは読譜指導について,「子どもの時代から，基礎を何年もかかって訓練と系統的教育を通して浸み込ませなければならない。」と述べている（コダーイ 1980）。

学校教育を終えた学生たちに，さらに「系統的教育」と「訓練」が必要ということであることから大学でのカリキュラムマネジメントや授業改善が大きな課題となると考える。

V　参考文献

1）緒方満（2010）．読譜力という基礎的能力～小・中学校を一貫して育む学力～．教育芸術社.

2）小学校学習指導要領（2008）．文部科学省.

3）中学校学習指導要領（2008）．文部科学省.

4）平石葉子（2014）．幼稚園，保育所から保育者養成校に求められている音楽教育．奈良保育学院研究紀要（16），81-91.

5）岩佐明子，冨田英子，烏丸佐知子（2015年3月13日）．保育者養成校における音楽教育についての調査研究：音楽基礎知識及び鍵盤楽器の練習量と演奏技術の観点から．京都文教短期大学研究紀要，53,21-30.

6）コダーイゾルターン（1980）．コダーイ・ゾルターンの教育思想と実践―生きた音楽の共有をめざして―．（中川弘一郎，訳）全音楽譜出版社.